はじめに

この手引は、レントの46日の間、ヨハネの福音書12章から19章までを読みながら、イエスのご受難を辿り、その奥義に与るために書かれました。毎日指定された箇所を読み、そこに描かれている主イエスの姿を想い、その声を聴きとってください。この手引を読むだけで終わることがないように、必ず聖書を開き、関連した箇所も開いてください。そして、先を急ぐことがないよう、その日、その日の箇所を十分に黙想するようにしましょう。

この手引には、イースターの黙想も加えてあります。これら47篇の黙想が、皆さんのレントの期間を豊かなものにする助けになるなら、執筆者、編者ともに、それにまさる喜びはありません。

執筆者は次のとおりで、執筆者のイニシャルが各ページの末尾に記されています。

新垣　太（FS）ダラス・ジャパニーズ・ミッション・チャーチ牧師
高岡宏光（HT）オーランド日本語バプテスト教会牧師
中島由美子（YN）ウェストロサンゼルス・ホーリネス教会牧師夫人
中尾フィリップ（PN）ダラス永楽長老教会日本語ミニストリー協力牧師
中尾照代（TN）同夫人

なお、聖句は新改訳２０１７より引用しています。引用の後の括弧内の数字はその箇所の節を表します。

家は香油の香りでいっぱいになった。（３）

映画やテレビなど、映像の世界はずいぶん進歩して、音が後ろから聞こえてきたり、画像が立体的に見えるようになりました。画面とともに揺れ動く椅子まで開発され、より一層の臨場感を味わうことができるようになりました。そんな中で一番遅れているのは「香り」でしょう。映画やテレビでは海の場面、山の場面は写せても、潮の香りや草の香りを放つことはできません。

最近の野菜は昔の野菜に比べて栄養価が低くなったと言われます。そう言えば、昔のような強い香りが無くなったように思います。プラスティックで作られた偽物の野菜に香りがないのはもちろんですが、本物の野菜でも、栄養価の低いものには香りが少ないのかもしれません。

これは、信仰でも同じだろうと思います。形ばかりの信仰や、この世と二股（ふたまた）をかけたような信仰には香りがほとんど無いのです。ベタニヤのマリヤのように主イエスのお心を知り、主のためなら高価なものも惜しまない思い切った信仰だけが、香りを放つことができるのです。

口臭や体臭のように自分では気付かない香りもあります。私はどんな霊的な香りを放っているのだろうかと反省しています。

祈り　主よ、思い切った信仰によって、私をキリストの香りとしてください。

PN

ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。（13）

初代教会では、主の降誕のときの天使の歌、「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように」や、イザヤが幻の中で聞いたセラフィムの歌、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる」などが礼拝で歌われました。地上の礼拝が天の礼拝とひとつとなるようにとの願いがそこにあります。

また、「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に」も歌われました。イスラエルの人々がろばに乗った主イエスを自分たちの王として迎えたように、キリスト者たちもそう賛美して、礼拝において主イエスを王として迎え、王として崇めたのです。

礼拝の形式や内容、また、そこで歌われる賛美は、民族や文化の中で変化してきました。しかし、礼拝の本質や目的は変えられてはならないと思います。最近は礼拝がエンターテーメント化していると言われます。そうならないよう、王として来られた主イエスに栄光をお返しする礼拝であり続けたいと思います。天では聖徒たちが「白い衣を身にまとい、手になつめ椰子（やし）の枝を持って」主を礼拝しているのですから（黙示録7・9）、地上でも「ホサナ。祝福あれ」と王なる主イエスに、心からの礼拝をささげたいと思います。

祈り　主よ、私たちの地上での賛美が天でのあなたへの賛美にとけあうものでありますように。PN

わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。（26）

主はユダヤの人々だけの救い主ではなく、すべての人の救い主です。そのことはヨハネの福音書一章にすでに明らかにされています。主は「すべての人を照らす…まことの光」（ヨハネ1・9）と呼ばれ、「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」（ヨハネ1・12、13）と明言されています。ヨハネの福音書が記された時には、すでにユダヤ人もギリシャ人もない時代が来ていました。

しかし、主が地上におられた時には、これはまだ隠されていました。主は、面会を求めた「ギリシャ人」のことを聞いて、その時がすぐそこに来ていることを感じ取られたのです。

そして、「イエスに会いたい」と願う者に、ご自分が行こうとするところについて来ること、ご自分がいるところに共にいることを求められました。主イエスに会いたいと願う者は多くいます。しかし、すべてが主が行こうとしておられる十字架への道を歩むわけではありません。父のみこころのうちにとどまるわけでもありません。この主の招きに応える幸いな信仰者でありたいと思います。

祈り　主よ、私を、常に、あなたと共におらせてください。

PN

そばに立っていてそれを聞いた群衆は、「雷が鳴ったのだ」と言った。（29）

主イエスが「父よ、御名の栄光を現してください」と祈ると、御父は「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう」と言われて、すぐさまそれにお答えになりました。こんなふうにすぐに祈りへの応答があったのは、御子がどれほど御父と密接な関係をお持ちになっていたかを示しています。神の子どもとされた私たちも天の父とさらに密接な関係を持っていたいと心から願います。

御父の即座の答えは、主が「御名の栄光」を願い求められたことに関係があると思います。アンソニー・デステファノの著書『神がつねに「はい」と言われる10の祈り』に、「神よ、あなたがおられることを示してください」、「神よ、私をあなたの道具にしてください」などの祈りは必ず聞かれると書かれていました。そうした祈りが「つねに聞かれる祈り」なら、神の栄光を求める祈りは「必ず神に聞かれる祈り」に違いありません。

しかし、群衆は主イエスに対する御父の声を理解できませんでした。人々にはそれが「雷が鳴った」としか聞こえませんでした。私たちも御父との交わりがなければ、神が語りかけておられるのに、それを単なる「音」としてしか聞こえなくなってしまいます。御心を求めて祈る唇、御言葉を聞く耳を持ちたいと思います。

祈り　主よ、あなたに聞く耳を、私に与えてください。

PN

試し読みはここまでです。

お気に入りましたら、

注文してください。

Penguin Club
https://penguinclub.net